法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

オクタビオ・パス vs. 「透明人間」 : 『孤独の迷宮』研究序説

阿波, 弓夫 / AWA, Yumio

(出版者 / Publisher)
法政大学言語・文化センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Language and culture / 言語と文化
(巻 / Volume)
6
(開始ページ / Start Page)
101
(終了ページ / End Page)
136
(発行年 / Year)
2009-01-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003625

Hosei University Repository

オクタビオ・パス vs.「透明人間」

――『孤独の迷宮』研究序説――

阿　波　弓　夫

序　文

本稿はオクタビオ・パスの主著『孤独の迷宮』(1950年)を主たる研究対象とする。パス(1914-1998)は詩人である。メキシコはミスコアック生まれの詩人で，スペインの詩人メロドリゲス・パドロンによると，このほかエッセイスト，ナラドール，劇作家，外交官でもある。しかし同詩人が今パスを語るとすれば歴史家パスを追記することは疑問の余地はなかろう。大著『ヘレニズム』(1959)をもってA. J. トインビーを歴史家と規定するなら，『尼僧ソル・ファナ・イネス・デラクルス，信仰の罠』(1982)をもってパスを歴史家と認定せぬわけにはいかないのである[1]。勿論，この場合「歴史家」の定義が問題となるが。

『孤独の迷宮』(以下，*LDS* と略す)を開く読者の多くは，著者の主張するメキシコ人のアイデンティティ(自己同一性)の希薄さに対して戸惑いを覚える。なぜなら，我々にとりメキシコ人ほど自らの国民性を強く明確に意識する国民はない，との印象が強いためである。例えば，彼らの喜怒哀楽。共に過した体験のある者にとり，そこに見られる新鮮な個性については記憶に残るはずだ。時間を忘れて人生を楽しみ，笑い踊り哀しみ沈黙する，彼らの在りようは他のいかなる国民とも異なる個性を有しているのである。パスはその「メキシコ人」をその都度見せる一時の現象，仮面でしかない，と考える。我々は逆にそれを彼らの本来的な在り方と受け取るところから，先の「ねじれ」は生じるのだ。だがパスには一体何が起ったのか。それが彼の文学とどのように係わるのか。本書第一章のある個所で，50年もすればこのような考えは理解できな

Hosei University Repository

くなろうと予測している。すでにその年数が経過しているが，ではこの間メキシコ人をしてアイデンティティを不動のものとしたのであろうか。パスの言わんとすることは決してそうではないだろう。むしろ，アイデンティティを探求する問題意識そのものが時代の変遷のなかで希薄になるということを表明しているのだ。問うべきものは変らずにそこに在る。50年前も今もメキシコ人の抱える問題は本質的には変っていない。

パスは一見すると，メキシコ人的な在り方は確かに誰が見ても見紛いようのないものであっても，それは時々の状況の産物であって，つまり，状況に対応して作りこまれたメキシコ人的現象である，ということ。しかも，メキシコ人にとっては，ある不変不動の本質の如きメキシコ人性というものがあるのではない，と考えるのである。パスは我々のメキシコ人像を二重に否定している。そして，生成こそ存在とするメキシコ人のアイデンティティ論を本書において展開する。スペイン語におけるSERとESTARの合一の瞬間においてメキシコを捉えようとしている。その際パスは，自らを俎上に載せることで，このねじれ状況を一人のメキシコ人として引き受け，かつその本質を探求する。これがエッセーとしての本書の性格である。歴史やその都度「現代」を一人の人間のうちで重ね合わせることで，もう一人の自分に至ろうとした。その結果が自分を裏切り，自らに変革を迫ることを覚悟の上で敢えて「迷宮」に立ち入らんとしたのである。その意味において，創成期のどの国民も経験する乗るかそるかの決死の試みであり，そこには万人にとっての他者として共感を呼ぶものがある。これらをもって，パスの*LDS*をどのように読むか，我々にどのような意味をもつのか，その研究に向けての端緒を開くことが本稿の目的である。

第一章　廃墟に（から）立つ詩人・オクタビオ・パス
（短詩「メキシコの詩（うた）」を軸に）

祖父はコーヒーを飲むと，私に
ファレスやポルフィリオ，さらに
スアーボス[2]やプラテアドス[3]を語る
テーブルクロスが硝煙臭くなった
父は酒が入ると，私に
サパタやビジャ，さらに

Hosei University Repository

ソト・イガマやマゴン兄弟を語る
テーブルクロスが硝煙臭くなった
私は何も言えない
誰のことを語ろうか[4]

（仮訳，筆者）

上記はパスの短詩「メキシコの詩（うた）」の全訳である。パスの詩篇には「メキシコ」という名称の入った作品は他にはない。その題名において既に稀有な作品である。筆者は『パスの作品の中のメキシコ』（1987）第1巻[5]の中で初めて出会った詩篇であるが，既に10年以上が経過している。初めから非常に親近感を覚えた。父や祖父と団欒のときをもつということ，それは外国に住む筆者には新鮮に迫るものがあった。しかし，パスの表現するものはそういうことではなかったろう。その後同一の短詩がパス自選詩集『オクタビオ・パス自選詩集（日々の炎焔）』[6]に収録されているのを知った。ここでは，パスのインド大使時代の詩集『東傾面』（1962-1968）の中の一篇として収録されており，制作場所および制作年がおよそ限定されて掲載されていた。しかし，いずれも同語篇は単独で独立した性格のものとして位置付けられていることに変化はなかった。この限りにおいて筆者はこの短詩に親しみ自由に連想の翼を拡げることが出来た。その一端は後述するとして，1990年に出版された『オクタビオ・パス全詩集（1935-1988）』[7]では，同短詩の処遇が「激変」した。『オクタビオ・パス全集』（以下，『全集』と略す）第11巻の『全詩作品集（1935-1970）』[8](1)においても先の『全詩集』同様，『東傾面』の中の一篇としてだが，そこでの配列構造がそのまま踏襲されている。『東傾面』所収の詩篇は前述の通りパスのインド大使時代の作品である。パス自身，1990年版『全詩集』の中で，これ自体パスには珍しいことだが，簡単な解説を付記している。それによると，これらの詩篇は大半がインド，アフガニスタン，セイロンに於て創作されたものである。即ち，「メキシコの詩」はヘレニズム文明圏の東端に位置する上記三ヶ国をそれぞれモチーフとする詩篇群の間に挟み込むように配置されていて，この極めて異例の計らいには驚かざるを得ない。そして，この特異なコンステラシオンの下に彼が言外に何らかの余情を込めたものであると考えるのが妥当である。先ず，その配列を確認しておこう。即ち，「西洋の断絶」（Intermitencias del Oeste）(1)から(4)までが「ヒマチャル・プラデシュ」（Himachal Pra-

Hosei University Repository

desh)[9] (1)から(3)を挾み込むように交互に配置される。前者の「西洋の断絶」はオリエント世界を現実に目の当たりにしたとき，詩人の脳裡をかすめた西洋として象徴的な意味が込められている。その「断絶」は4篇の短詩からなる。即ち，(1)のロシア，(2)のメキシコ，(3)のメキシコ，(4)のパリである。いずれも病んだ物質文明がもたらす戦争と人間の死を象徴する。それらはオリエントの詩と交差させられている。この点を確認するため「メキシコの詩」との関係に限って具体的に検討する。同短詩はここでは「西洋の断絶」(2)に副題として括弧付きて付帯されている。「ヒマチャル・プラデシュ」(1)と(2)に挾まれている。以下にその二篇を紹介する。

「ヒマチャル・プラデシュ」(1)

ファン・リスカノに捧ぐ

私は見た
山の裾野に
地平線が雲散するのを
(馬の頭上を飛び交う忙しげな蜜蜂)

私は見た
意識の混濁
息苦しそうに干上がった庭
(花弁に静止する一羽の蝶の縞模様)

私は見た
賢者の山並み
そこは風が鷲を弄ぶ
(骨と皮の少女が老婆と山より大きな荷物を背負う)

(仮訳，筆者)

「ヒマチャル・プラデシュ」(2)（以下，*HP* と略す）

我々の（それ）は

Hosei University Repository

（貪欲で太鼓腹の，そして）
文明の中の文明なのだ。
（脂ぎった）
最古の
（山羊の群の中で彼の濃黄色の外套は焔だった）
世界中で！
（運動する）
この大地は
（そして松の乾いた刺の上を歩くサンダルの音は）
神聖なり。
大地は
（まるで足で踏みつけるよう）聖典ベーダの
（灰燼）
人間は
（人さし指で）
考え始めた
（きっぱりと）
5000年前に
（バラモン教の賢者が私に啓示した）
ここで……
（ヒマラヤ山脈は地上で最も高い山々）

（仮訳，筆者）

以上，*HP* (1)，*HP* (2)を読んで先ず誰もが感じるのは，画家平山郁夫の描く古代シルクロード都市サマルカンドや桜蘭などとの落差であろう。ロマンや郷愁は微塵もない。砂漠と太陽が痩細った少女や老婆の全身に情容赦なく襲いかかる。生と死が常にそこにあってその自然を一途に信仰の高みにおいて受け入れる。この明日の生命をも知れぬ身を絶対者なる賢者の御心のままとして，泰然自若の相の下に暮す人々。人間の健気さと無常が一体となっている。パスはオリエント世界でメキシコのインディオを想起したのではなかったか。*HP* (1)は「メキシコの詩」と対極的な関係にある。前者からは，広大無限の大地，山の裾野に消滅する地平線。馬，蝶，蜜蜂，鷲。後者からは，「コーヒー」「酒」

Hosei University Repository

「テーブルクロス」など閉じられた（cerrado）空間感覚が先ず際立つ。しかし，視覚的要素を取除いてみると，そこに共通して流れる空気は生か死か，である。人間の無常さと健気さと愚かさ，であろう。無慈悲な自然と絶対者を人々の無心の信仰が繋ぐ。一方は，宗教という伝統の糸に縛られ操られしながらも，*HP* (2)を合わせ読めば，砂漠の民がこの極限の地において神の恩寵によって生き延びてきたのだ。他方は，物質欲という人間の内面が生んだ亡霊に突き動かされて戦争と死体の山を積み上げる。硝煙の臭いとは死臭とも読み換えられる。パスはオリエントの民を目前にして，人間には様々な生き方があることを悟っただろう。しかし，それだけでは彼が「メキシコの詩」をこのような仕掛けの下に再創造したことの意味を理解したことにはなるまい。それは我々も彼らも何ら変るところがないではないかという着想ではなかったか。換言すると，双方とも他人ごとではない，ということである。先述の通り，一方は賢者の教えと死に満ちた砂漠の風土，他方は豊かな自然に恵まれながら政敵や反対者を排除する間断なき抗争の風土，である。*HP* (1)と *HP* (2)の間に配置された短詩「メキシコの詩」は，さしずめ「赤と黒の間で硬直した青」[10] のように読みが限定されてしまっている。むしろ，パスの目的はそこにあった，と言うべきかも知れないが，これは筆者のパスに対するささやかな反問である。先の短詩と初めて出会ったときから何の制約もなしに親しめた者には，少なからず苦痛を覚えるのである。短詩が身動きできない程，一定の意味，役割を付与させられてしまっているからだ。しかし，言うまでもなく，このことによって「メキシコ」という「ローカル」かつ「ナショナル」な言葉は普遍化させられている。人間の生き方をめぐる両極性が増幅され，同時に生きる意志によってのみ支えられた同質の文明原理がその背後に浮上してくるのである。もう少しより少なく苛酷で，より少なく非人間的な在り方があってもいいのではないか，という思いである。

それでは短詩「メキシコの詩」の初期収録版に見られるように単独で提出された詩篇からはどんな世界が背後に拡がるのか。詩人パスの荒涼たる風景を改めて考えてみたい。この短詩はパス家三代の宿命的な課題を明示している。今日の希薄な政治意識からすれば想像できない程，その政治的信念に燃える家風である。ここには，パスがパス家の運命とも言える政治的伝統への抗い難い血脈[11] を自失茫然のうちに想起する姿がある。結論から言えば，パスの「生きる」は彼自身が模索する前から厳然と規定されているのである。ただ彼がその

Hosei University Repository

伝統に粛粛と従ったかと言えばそうではなかった。むしろ激しい親子の対立が，ある時期から始った。ところで，この詩篇はいかなる理由で「変更」されたのだろうか。あるいは先述のような配置の下に「役付」けされたのだろうか。その真相は推測するしかない。個人的，あるいは政治的性格が強すぎる，と考えられたのではないか。しかし，果してこの短詩はそれ程「ローカル」なもの，ないし「パーソナル」なものであろうか。この辺りの問題を糸口に再度この詩篇を考えたい。まず何よりも詩篇そのものを間近に眺めてみよう。祖父はファレスやポルフィリオを語っている。（ベニート）ファレスは大統領（1858-1872）を務めた自由派の政治家で弁護士。ポルフィリオ（ディアス）は，1976年にクーデターで政権を取り，その後正式大統領となるも長期独裁（1911年まで）を続けた軍人。これに対して父親は，サパタ，ビジャ，ソト・イガマ，マゴン兄弟を語っている。サパタはメキシコ南部の農民革命の指導者，ビジャは北部メキシコの革命軍首領。ソト・イガマは農民指導者・農地改革の思想家。マゴン兄弟は北部の農工業地帯を中心に社会活動を行った無政府主義者。以上から言えることは，祖父と父親の話題とする主人公たちは次の一点で大別される。前者は大統領職に就いた者たち。後者は革命実践者または，政治思想・革命思想の扇動者たちである。そしてそれに対して祖父と父親はどのように動いたか。前者は，19世紀の半ばから20世紀の初期の言論人として新聞を創刊して論戦を挑み，下院議員となり下野しても無数の著書を世に問い，大衆の蒙を啓いた。後者は19世紀後半から20世紀初期の弁護士・新聞記者。サパタら南部革命軍の米国代表としてロサンゼルスに一時駐在した。いずれも政治の渦中に身を投じて，国政や支持者の命運に自己の浮沈を重ねた。しかし，両者は対極に位置している。祖父の語る二人の大統領は言わば近代化推進の象徴である。この点に関しては，*LDS* の第5章「征服と植民」と第6章「独立から革命へ」の二つの章で詳述される。また，『オクタビオ・パスの作品の中のメキシコ』第1巻にも同様の二章が収録されていて，そこでのパスの議論（212-215頁）に従うと，近代の合理主義精神の徹底という時代のイデオロギーの下に農村社会，特に先住民社会を成立させてきた共同体的土地所有制度（「カルプリ」）を解体することを主たる政策課題としてきた。このカルプリ制は，スペイン征服以前から古代メキシコ人の生産的・文化的空間としてメキシコ文化の特異性を育んできたもので，この解体とは取りもなおさずメキシコの伝統の解体を意味した。近代のこの「侵略」，スペイン植民地社会においてもインディアス諸法

Hosei University Repository

によって保護されてきた伝統的在り方を破壊する「暴挙」に対して武装蜂起したのがサパタやビジャであり，ソト・イガマや，また異なる観点からではあるが，マゴン兄弟であった，と言える。従って祖父と父親とは言わば正反対の立場なのであって，パスがこの短詩の最後の詩句「誰のことを話そうか」というのは，意味としては，親子三代がこぞって組したり，支持したりする相手が存在すると仮定して，自分には誰が相当するのか，と自問すること，そのような関係にはないのである。『オクタビオ・パスの作品に於けるメキシコ』（全三巻）の共同編集者 L. M. シュナイダーは，パスとのインタビューの冒頭，この短詩を挙げ「パスは決して沈黙しなかった。批判的情熱をもって現代メキシコの重要な出来ごとについて健筆を振った」と語っている。その健筆はまさに，祖父と父親を継ぎながら，しかも彼らのいずれとも違うという仕方でなされたのである。パスはその名前を受け継いだ父親との間に深い溝があった。詩集『明白な過去』の中で，「酒の鎖に繋がれて　父は戦場の砲火の下を往還し（略）私は彼と一度なりとも向き合えず　今は夢の中で出会うのみ　死者の微かな祖国話すのはいつも心にも無いこと」[12] と告白している。1936 年，その父親は轢死する。「約束された」自らと訣別するかのように翌年，東方マヤ文明の聖地メリダに識字運動家として旅立つ。石油や鉄道資本の国有化断行でメキシコ革命の再来を思わせる，ラサロ・カルデナス政権（1934-1940）の台頭に相呼応するように「土地も家も学校も捨てて」この，まるで絶海の孤島の如きユカタンのエネケン農園で奴隷制労働に喘ぐ先住民マヤ族の末裔を「解放」するために，大遠征を行う。そのことでパスは父親との「もう一つの別れ」を遂げた。一見すると，対極の道を選択したかに見える。一方では，「詩的創造は利害得失，努力報償といった観念に還元できるものでない。詩にあってはすべてが利益であり，すべてが損失である」[13] と，詩人の「無益性」「無生産性」を語っている。しかし，他方では，パスの現実は，「家が崩れ落ちていくなか，私は育った。今も昔も名も知れぬ瓦礫に生える雑草」[14] と，貧窮と孤独の精神を詩化する過程にあったとは言え，パスは詩人として，政治から最も遠い場所に身を置くことで，真の中立を獲得する。外国企業や政府職員として一定のステータスを享受した，サルバドール・ノボら一世代前の詩人たち，「同時代人」グループ（Los Contemporáneos）の面々とは根本的に異なる基盤に立っていた。ある面では祖父や父親と同じ境遇を生きたが，現実は彼をより一層厳しいものにした。マリオ・サンティとのインタビューの中で，「エル・ポプラール

Hosei University Repository

紙を辞職（1939年）してから収入の道が途絶えた。当時の若者にとり，最大の問題はどう生きるかではなく，生き残れるか否か，だった」[15] と窮地に陥った様子を述懐しているが，その辞職の原因は同年の独ソ不可侵協定に対するパスの反発によるものであった。中立の立場を，祖父や父親とはまた違った意味で，一貫して採り続けることの極めて困難な時代で，まさに詩人として生き残ることの絶望的な状況がそこにはあった。パスにとり，メキシコ革命の過程の中で一瞬社会の表面に姿を現した農民大衆，先住民インディオの伝統や心情を汲み上げた，新たな国造りしかメキシコの近代化の道はありえなかった。それら民衆の息吹を見て見ぬふりをして葬り去った国政に対してパスの舌鋒は鋭かった。党派性やイデオロギーを越えたところで論戦を挑み続けた。国土の半分を喪失することになった内戦，百万の人口を犠牲にした革命（1910-1917）。一歩間誤えば，そのいずれかに暴走しかねない危うい現代メキシコの国造り過程。さらに，メキシコ人性の本質を自覚すればこそ，そのような場からの発言しかありえないとするのも，この詩篇「メキシコの詩」の意味するところだろう。

ではパスは，いずれの近代化にコインを投げたのだろうか。祖父のそれか父親のそれか。いずれの「それ」でもなく，異なる「それ」である。「右」からと，「左」からとの批判と攻撃を浴びながら，経済苦を引きずりつつではあるが，異なる，もう一つの近代を基礎付ける根本原理・精神を詩学として，この現実の廃墟に立って構想し続けた。

第二章　二人の「透明人間」

オクタビオ・パスは1968年にインド大使を辞任するまでの約20年間，断続的にではあるが，フランス，インド，香港，日本の自国大使館に赴任した。その出発点が1946年からのパリ駐在であった。同僚の一人で文学や演劇面で肌の合ったロドルフォ・ウシグリという劇作家がすでに先行していて，彼が1947年に帰国するまでの2年間，大戦直後のパリ体験を共有している[16]。ウシグリはメキシコではすでに知名度の高い劇作家だったが，二人はまだ付き合う間柄にはなかった。彼らが急接近するのは，先に述べたように二人が芸術家気質だったことと，両者とも精神的には一種の虚脱状態を共有していたことによる。パスはウシグリについて鮮かな交友録を残している。筆者はその述懐の中に，“invisible”[17] というスペイン語を見出し，初めて「透明人間」という，

Hosei University Repository

その語彙の意味する本当のところと出会った。少し長くなるが，以下はその部分の引用である。「彼は上品なサロンを訪ねたり，流行りのカフェや酒場を梯子していた。その辺りには若者たちや乱痴気騒ぎする若い女たちが群がっていた。彼はそういう場所に威勢よく出向いては肩を落して帰った。ある夜私達はそういう場所に繰出したが，その場を出るや否や，彼は鏡を見て〈透明人間になったぞ！〉（¡Me he vuelto invisible!）と叫んだ。私は彼のその唐突な言い方が可笑しくてプッと吹き出し，そして泣いた……（略）彼はハイネ，ラフォルグ，チャップリンと同類の人間です。自分で自分を傷付けるという，最も残酷で難しい芸術の巨匠です」[18]。先ず，本章の課題との関係から注意を要することは，ウシグリの表現の仕方や時機が意表を突くジョークであったことだろう。それに対して，それが軽妙であったため，即座に笑ってしまった（“me hizo reir”）のである。しかし，そこで一笑に付してその場は終ったのか，と言えば，そうではない。一瞬，間を置いてパスは「泣いた」のである。ウシグリがあまり気心の知れない同僚であれば，パスの反応は違っていたかも知れない。単純に面白い冗談だった（全ての冗談が面白い訳ではないが）ので笑ったのであれば，事態は何ら特異さを持つものではない。この部分が本稿を構想する直接のきっかけとなっているので，もう少し具体的に検討したい。まず，泣いたり，笑ったり，というのは人間の自然な感情の発露であり，日常の風景の一部である。しかし，「泣き笑い」あるいはまた，「笑い泣き」という行為は人間のより複雑な内面的衝動（正反対の心境の合体）を表現するもので日常より非日常に近い現象と言える。パスの回想記を読みながら，そこに漂うコミカルで庶民的な哀感は何故なのか。「透明人間になった！」とウシグリが口走ったことが，どうしてパスにそうした非日常的な反応を呼び起こしたのだろうか。ウシグリとパスとは同じ心境だったのだろうか。彼らにとって “invisible” とは何を意味していたか，先ず語彙の面から考えてみよう。この際，注意すべきは，H. G. ウエルズの SF 小説『透明人間』が単行本として出版されたのは 1897 年，およそ 100 年前のことだ。さらに，1946 年，二人がパリ在住中にペンギンブックスから “The Invisible Man: A Grotesque Romance” [19] が出版されていることだ。ウシグリが “¡Me he vuelto invisible!” と叫んだとき，パスは当然ウエルズの作品が念頭に浮んだであろう。『透明人間』が「人格の分裂，二重人格の問題を扱っている」[20] という点においても，ウシグリにはよけいにこの言葉に繊細にならざるを得ない。パスは「貧しいヨーロッパ系移民

Hosei University Repository

の家庭に生まれた彼はメキシコでは常に異邦人的な感情に捕らわれ苦しんだ」と述懐していることから推測するに，彼が「二人の自己」の相克を抱え込んでいたことは明らかである。特に，彼においては，そうした青年期の体験が創作上のバネとなっているのであるが，彼の孤独に追い打ちをかけたのは，1930-40年代のメキシコを覆った硬直した民族主義だった。批判に不寛容な社会的空気の中で，ウシグリの，特に革命政府の腐敗を主題とする1937年作の傑作 *El gesticulador*（「張子の虎」）などは厳しい「ボイコット」に直面したのみならず，作家の身の安全すら危惧された。彼はパスと2年足らず働いたあと，1947年に一担帰国（Rodolfo abandonó París en 1947）するが，冷遇され続けた。そうした世相に嫌気がさして外国の大使館を転々とする「自主亡命」の道を選んだ，という。「最良の劇作家が生き埋めにされた」[21] とパスは批評している。アルフォンソ・レジェス（1889-1959）と言えば，パスの「一生の恩人」とも言える人物。パスより一世代前の外交官であるとともに，詩人で作家だが，父親が政府転覆未遂事件の首謀者となったため，ウシグリ同様に各国のメキシコ大使館を遍歴し，「亡命生活を送った」（vivía exiliado en su propia tierra.）[22] パスはその時の心境を読んだ彼の詩篇を紹介している。

多分，幸せ者ではなかった
私は，私であり，私でなかった
私は出て行きたいと思う者に
　戻っても泣くだけだ
私は広い世界に後悔していない
　戻るのは私ではない，
　私の奴隷の足だ[23]

有能で開明的な知識人がどれほど狭隘な民族主義の犠牲になったかが明らかだ。このレジェスの葛藤の詩篇はそのままウシグリの胸の内をも活写している。そのようにパスが考えていることは容易に推察できる。パスがウシグリと再会する1946年には依然として彼の最高傑作「張子の虎」は上演されていない。「自分の国での透明人間扱いのほか，フランス劇作家界の冷淡な態度が彼を傷付けた」[24] ウシグリにとり，自分を認めていない祖国のために身命を擲って働くことの悲哀は深く想像に難くない。「私は私でありながら私でなかった」と

Hosei University Repository

いう詩句に匹敵するウシグリの内外での疎外感がレジェスの詩篇の心と重なる。彼は，まるでチャップリンの道化師のように振って「透明人間になった！」と，鏡を覗き見ながら叫び声を上げて笑わせる。「その夜」も若者たちの集う場所に出て行った。しかし，そこではカミュやサルトルの「実存主義の新しい演劇が衆目を集めていた。この主導者二名は社会変革に冷めてはいても，プロレタリア革命の到来に一度ならず期待と恍惚感に浸ったことのある世代。そこではかつての政治的信念も倫理上の確信も拠って立つ土台を喪失していた。パスもその世代に属していた。彼がパリで感じていた幾分頽廃的な心境はその辺りに由来していた。しかし，ウシグリは彼らとは戦後の気分を異にしていた。彼はメキシコ革命で戦争の残忍さを体験し尽していた。従って戦争や革命に一切幻想を抱かなかった。ウシグリはパリの知識人たちと共有するものがなかった。彼らの間でスターリニズムの影響が高まったパリではウシグリの孤立感は一層強いものがあった。この芸術家の悲運な境地に共感するところがあったからこそ，パスは彼の「透明人間」ジョークに笑い，そして泣いたのだろう。二人とも，自国内で透明人間扱い（ninguneo）された末に，いささか時代錯誤的な言い方になるが，「遠島の刑」にされたという，心の内に重く伸し掛かる底知れぬ不安をお互いに思わず覗き見た瞬間と言える。

同年パスとウシグリはフランス亡命中のパブロ・ピカソと面会している。ウシグリは，「ゲルニカ」の巨匠に幾人かのメキシコ人画家の名前を挙げて，彼らの仕事に対する評価を得ようとした。しかし，ウシグリが挙げたどの画家に対してもピカソの反応は無きに等しかった。彼のメキシコ人への関心の薄さにウシグリは愕然とした様子を見せたというが，パスはこれに対して，まずメキシコ人自身が自国で働く作家たちに関心を持つべきであり，ピカソの責任ではないとその時感じた，と述懐する。そこでは，透明人間扱いに関して重い葛藤から脱け出たような余裕すら感じさせる。それはパスが，ウシグリとは対極的に自分を理解してくれるフランス人の仲間を徐々に見出しつつあったからだろう。その最良の瞬間がアンドレ・ブルトンらシュールレアリストたちとの啓示的な出会いである。「1946 年か 1947 年のことで，遅れはしたが，あたかも約束の場所に最後に馳せつけたメキシコ人ないしイスパノアメリカ人であるかのように迎え入れた」[25] と若い詩人への励ましの手紙（ニューデリー，1965 年 9 月 20 日付）の中で語っている。しかし，パスの胸中は焦燥感を深めていたことは容易に推察できる。1942 年の詩集『世界の果てに』[26] 以来，何も出版し

Hosei University Repository

ていなかった。「地の果て」で埋もれ朽ち果てていくことへの絶望的な抵抗，そのことが，後に彼が「私の真の処女詩集」（“mi verdadero primer libro”）と評する『言葉の下の自由』[27]（以下，*LBP* と略す）の出版を友人に懇願する際の尋常でない逼迫感の内に表われている。「作品の出版はないが，働き，かつ存在している私がいることを分からせたい」と訴える手紙をレジェスに書き送っているが，この『レジェス・パス往復書簡集』[28]を編纂したアンソニー・スタントンは「最初の手紙（レジェス宛）は同書（*LBP* をさす―筆者）が著者の存在証明以外の何ものでもなかったことを明らかにしている」[29]と解説している。さらに，その後の手紙でパス自身同書の出版に全額支払うことも辞さないと断言していることを考えると，パスの孤独感の深さがより現実味を帯びる。以下に「倹しき人生」[30]の一部を紹介する。

…
束の間の生の全一内に観て
ステップを上手に踏み踊り
光輝く身体の傍に眠ること
あたかも浜辺に満ちる大陽
見知らぬ友人の手を取ろう
不毛と苦悩の日ならばこそ
そしてその手が持つべきは
昨日の友人の手にない信念
酢っぱさに顔をしかめずに
鏡でいつもの渋面を見ずに
沈黙がカチカチ歯音にも毛
を逆立てず孤独を試すこと
…（略）

（仮訳，筆者）

パリ在住初期のパスの作品には，同詩篇のように透明人間の体験を乗り越える形での内省的な作品が多いのもそのためである。後に見るように，パスが自主亡命で出国する 1943 年末までに書いた舌鋒を極めた新聞掲載評論などと比較すると，「倹しき人生」のパスはまるで別人のように感じられる。彼の「変

Hosei University Repository

貌」（森有正の定義による）[31] は明らかである。そこから，「透明人間」は時間と空間を越える，新たな言葉に転換され，再生されるのである。el otro（「他者」），el subsuelo（「地下」），Nadie（「誰でも無い者」），Ninguno（「何者でも無い者」）などがそれである。el invisible（「不可視なもの」）が一担メキシコの地に十分に足をつけたことで，それは一気に普遍化しえる言葉へと転じるのである。

第三章　孤独の迷路：螺旋の迷宮

(1)　孤独の始原

オクタビオ・パスは特異な存在（la singularidad de ser）である。このように言えば，当然，即座に何を基準にそのように規定されるのか，との反問が生じる。パスは自伝「*Itinerario*（『旅程』）[32] の中で三つの孤独の経験を成長過程に応じての，変貌の相の下に語っている。最初は幼児期の経験である。母性に包まれ一体化する段階で誰もが経験する離脱感の内に生じるものだ。「間断なく人が往来する中で，個体が泣いている」状態，「肉体のない，無言の不可視な存在」であった，という。二つ目は，6歳のときロサンゼルスで入園した幼稚園での異文化衝激である。スプーンのことをクチャーラとスペイン語で言って仲間に嘲笑された。帰国して入学したフランス系学院で，彼の「栗色の毛髪，白人系の顔色と目」[33] が奇異な目で見られ外国人扱いされ喧嘩が絶えなかった。「私は一体どこの人間なのか。自分はメキシコ人だと感じるのに，彼らは私をメキシコ人見做してくれない」から，その後も永い間苦しんだし，時には罪悪感を抱いた，と語る。最後の三つ目は，サパタ派農民軍指導者の一人を父親と共に尋ねた際，「西ゴート系（ゲルマン系）の息子があったとは知らなかった！」と彼を見るなり叫んだので，その場に居合わせた農民仲間全員大爆笑した。それをまるで自分を断罪する声のように聞いた，という。最初の経験は人間として誕生することに伴い生じる離脱感で万人共通のものだが，第二，第三のそれは，人間の本性によるもので，程度の差はあれ，時代と場所を問わず繰り返えされる他者への猜疑心が根本にある，という。猜疑心と不安感とは表裏一体であり，特に社会的危機や騒乱の時代には不信感として増幅される。以上のように，彼の自伝の書では三つの孤独の経験の事実が明らかにされると共に，特に時代状況から察するところ異質なもの全般に対する不審（不信）感

Hosei University Repository

が極度に強まった時期に当たる，と述懐している。即ち，経験を普遍化することで，無論，人間の陥り易い精神的狭隘さを確認するものではあるが，同時にそうした偏見を醸成した時代や人間との和解を表明するものと読める。パスは特異な人間である，と言う場合，とりわけ，『旅程』によって先回りするようではあるが，彼自身の言葉で彼が闘った偏見との苦悩の過程を確認しておく必要はあろう。しかし，もっと身辺的な議論から始められないと，パスを苦しめた現実の本当のところが見えてこないのである。「特異な存在」を筆者は，"la singularidad de ser" と付言しておいたが，この用語は『孤独の迷宮』の第一章「パチューコスとその他の極端」の冒頭文に見られる語句である。要するに，彼の全人生を一貫して流れている問題意識（そのことは同書の冒頭部でも語っているが）の本質そのものなのである。従って，もっと具体的な諸事実，諸現象をもって接近していく必要があり，さもなければ，「和解」という言葉がわれわれの頭上を素通りしていくことにもなりかねない。より明確に言えば，パスがこの「偏見」を普遍化した段階で，異なる文化・文明を越えてわれわれ一人一人がどのように受けとめるか返答を迫まるものなのである。

さて，一般的に見ると，特に我々日本人から見ると，彼の外見的な風貌から言えば，「白人系のメキシコ人」という言い方ができる。こういう言い方はあくまで便宜上の言い方であることは言うまでもない。まず何よりもメキシコ人が白人系や黒人系に二分されるわけではないからだ。また，実際にそういうメキシコ人はいない。こういう言い方は日々，われわれがメキシコ人に対して無意識に再生する偏見の一種であろう。とりわけ重要なことはパスを「白人系」あるいは「欧米系」（これはパスがフランス系学院に入学した際に不審な眼で見られた —— un gringo（ウン グリンゴ）〈アメリカ人〉，un franchute（フランチュテ）〈フランス人〉，un gachupín（ガチュピン）〈スペイン人〉の蔑称 —— のと同じもの）と系統化したり，」区別したりすると，まず出発点から根本的な誤解を犯すことになる。即ち，伝統や旧習に固執する保守派，または民族派，ないし西欧近代の産物である技術や制度，または思想を受容することに専念する開明派といった単純な先入観に陥ることになる。われわれがメキシコのみならず発展途上国の知識人を大雑把に捉えるときによく出される二分法イメージである。このイメージはオクタビオ・パスには該当しない。パスもパス家の伝統の人である。既に述べたように，祖父は新聞人であり，報道人であり作家，そして上院議員も務めた人だ。フランス大革命の影響の下に 19 世紀半ば国内改革を断行した B. ファレス大統領に反対し，

Hosei University Repository

さらに反ファレス政権を旗示しに決起したP. ディアス将軍のクーデターに合流した。その息子（パスの父親のこと）は新聞人，作家，そして弁護士である。メキシコ市に隣接するモレーロス州で武装蜂起した農民革命軍首領エミリアーノ・サパタに共鳴してその戦列に加わった。つまり，パス家は自由主義者であり，同時にインディヘニスタ（先住民インディオ擁護主義者）である。パスはその伝統を継ぐ，元来特異な存在なのである。この点は，メキシコなどの伝統的な政治的対立図式からは把捉しにくいことは言うまでもない。メキシコ革命で権力を握ったカウディージョス（首領）や地方の小指導者たちはメスチーソ系の文盲の人物が多かった。彼らは元来，スペイン植民地下でスペイン人と先住民インディオとの混血として始まったとするなら，19世紀初めのスペインからの独立以降も，社会の下層民として牧童頭や，アシエンダ農園・銀鉱山の現場監督，山賊，警備員，政治家の秘書，軍人，その他都市部の各種行商人などで，一種危険で正体不明の人間という差別偏見の対象であった。メキシコ革命によって彼らは一気に社会の前面に台頭し，富豪家族の子女と婚姻関係を結んで政治的にも社会的にも実力者としてのし上った。その結果，逆に彼らが差別や偏見の側に転じて，それが同時に革命後の政策にも様々に反映することになる。異端者や少数意見者と議論するのではなく，単純に無視し，透明人間扱いをする。パスもその犠牲になった一人である。しかし，より一層強力なNinguneo（ニングネオ）（透明人間化）を余儀なくされたのは，革命軍の主要勢力を構成した農民・インディオ大衆であった。パスやパス家の人々が特異なのは，そうしたメキシコ「近代」の流れの中で最も基底部を構成する農民と先住民の側に身を置き続けたことにある。パスが革命政府を真向うから批判するのは農民・インディオに対する欺瞞にある。次章でノベダーデス紙に掲載された彼の批評文を検討するが，その際この点がより明瞭になるだろうが，パスを理解しにくくしている事態も同時に明らかとなる。つまり，パス家三代の思想的共通項は，メキシコの伝統とは，スペイン人のそれでも，インディオのそれでもなく，両者の重なりを継ぐ伝統の下に於てしかないこと。そこにしかメキシコの持続可能な近代はありえないとする立場，生活と行動を通じて練り上げられた原理である。メキシコ革命後，若い知識人の多くは無学文盲の革命将軍たちの「手足」となったが，パスが先の紙上で舌鋒を強めるのは政治を内側から導びくことが出来た知識人たちの精神的頽廃を糾弾するためである。一方をもって他方を排除する，植民地的発想を脱却しえていない革命政府やそれに仕える知識人の知

Hosei University Repository

性を政治的昇進の道具化する彼らに対する哀悼の弁とも読める。

1943年までのパスの文章には「国内を視察して回ると」という文句がよく出てくる。これが彼の実体験に基いていることは明らかであるが，この時代まだ革命が完全に終結していない段階にあって，このような体験をもつメキシコ人は極めて数少ない存在である。これは彼が「メキシコ人は」というときの「メキシコ人」の意味についても同様である。知識人一般の「メキシコ人」とは違って，彼のは地に足の付いた「メキシコ人」であると言える。つまり，一般人がメキシコ市中心に，特に，当時の，この「島国的」空間を基点に自国全体をイメージするしか出来ない時代にあって，パスは全体を体感するなかで「メキシコ人」イメージを把握していた，ということ。この現実を想像することは，極めて難しいことである。そういう意味でも，パスは稀有な存在である。パスが極めて高所から，ほぼ全てを見通した議論を展開するのも，物言はぬ農民・先住民，インディオ大衆を直接知り，国土を歩き回った経験に裏付けられているからだ。その代償としてパスに与えられたものは最も激しい「透明人間扱い」だった。彼の舌鋒が彼自身に跳ね返って彼をより深く傷付けることになった。

(2) 孤独の展開

LDS がいつ，どのように書かれたか，という問いがよくなされるようだ。自伝『旅程』の冒頭の章で同名の比較的短い文章をもって改めて回答していることからも明らかだ。パスのことはパスが一番よく知っている。これは言うまでもないことだ。言葉を変え，話題を換えしながら様々に語り尽している。古くは評論集 *Las peras del olmo*（『楡の梨』）[34] であり，それに続く *Puertas al campo*（「田園への扉』）[35] である。特に後者の序文には，1957年に閉じるパスの詩学の第二期（1943-1957）について，およそ15年の経過を踏まえて高所から *LDS* 成立の背景を批評している。例えば，「スペインという我々の不可欠の一部」との対話が死活問題であり，それなしには，「本当の我々自身にはなりえないだろう」[36] と。また，「世論が制度的機関となり，作家を骨抜きにする意志は消えてはいない」。その中で，作家にとって「最高の刑罰は見落されること，精神的不在である」と語り，インテリゲンチアの「透明人間化」は「見えないが，少なからず有効な検閲」の下にあること等々，変化する時代に於いて新たな問題意識をもって回答して行く必要性を強調している。このため

Hosei University Repository

LDS の精神をその成立の起源に立ち戻って創造的に読み直すことが肝心となる。それは「自分は何者か」という問いが，時代の推移に応じる形で再提起し直さなければならない。つまり，自分と世界との関係性を常に今に翻訳し直す精神が *LDS* の内に 1949 年の執筆当時から包含されていた，と言える。我々も彼と同じ時代を生き，その時代と向き合っているのであれば，パスが言い尽したかに見える *LDS* の背景を我々なりに読み込む一種の参加が必要となる。我々はパスを想像することは可能である。

1943 年はパス詩学上の決定的瞬間となる。同年，ノベダデス紙上に掲載された諸論文は *LDS* の素材がそのままの言葉で展開されており，実践的にはその始原の最大のものである。その意味で 1933 年に始まる一時期の終焉を画する。この間，新聞編集，批評，ジャーナリズム，というパス家三代の言論人の家風を継ぐ方向での営為が，経済的苦境の深まるなか続けられる。雑誌，新聞合わせて 15 種に執筆しており，その内新聞は 4 紙（政府紙系 *El Nacional*，地方紙 *Diario de Sureste*，政府系左翼紙 *El Popular*，そして，ここで検討する都市中産者向けの *Novedades*）である。同紙は当初，週間紙として出発し，社主兼編集者のイグナシオ・エリアスにより 1935 年に創刊されたものである。1939 年半ばに日刊紙[37] に転じた。パスの記名入り 27 本の記事は，配信会社を経由して掲載されたもので，著者の独自性が維持されていることは明白である。他の三紙についても同様のことが言える。ここには，後に「内面的経験」を経て *LDS* に結実するメキシコ人，メキシコ文化・歴史に関する思索が，荒削りではあるが，鋭く世論に挑むような筆致で展開される。その幾つかを検討することで，この時代に於けるパスの問題意識を俯瞰してみたい。

「優柔不断」（*El vacilón*）では，「我が国では，大地も建物も国民も全てが自信喪失状態で，崩壊寸前にある」[38]「メキシコは優柔不断の国か」と，何ごとも決断に手間どる国民性を痛烈に批判する。多義性をもつ文体のためその射程距離と包括範囲は無類のものがある。革命の恩恵，浴した一部の者たちが踏み台にした，かつての社会階層の仲間に対して，自分を偽り，見て見ぬ振りをする。一方では罪悪感，他方では恐怖感を抱く結果となっている。これにより，何事にも二の足を踏み方向定まらず現実社会に様々な悪影響を生じさせている。革命直後の国政再建期を担ったバスコンセロス（元文相，大統領候補）派の知識人たちが行き詰まりをみせ，革命後第二世代（1905-1920 年代）にあたるパスなど，批判的に前世代を継承する面と，特に革命の制度化に対する強い反発

Hosei University Repository

がこの議論の背景にある。言うまでもなく，「優柔不断なメキシコ人」という国民性が，決して生来のものではなく，革命主体が自ら生み出した実像と虚像のズレに端を発すると指摘している。

「透明人間製造者と透明人間」（*Don Nadie y Ninguno*）はパス独特の権力者批判である。この，3月23日付の論文は，庶民の目線から，しかも彼らの日常語を用いて権力に舌鋒を浴びせている。と同時に，メキシコの庶民特有の，辛辣な風刺精神と諧謔性が読ませどころと言える。Don Nadie はいつでも，どこでも人の行くところ立ち寄るところに顔を出して虚勢を張る。新聞，雑誌，宴会，会議，知らぬものはない公人である。その「太った腹の中には Nada（無存在，無）宿る」，という。Don Nadie の同伴者が Ninguno（「透明人間」）である。Don Nadie の恩寵に与かるのが仕事で，いつかはその後釜の座を狙うつもりが，発覚して永久に ningunear（透明人間化）される。Ningunear とは，ペドロやファンを Ninguno（「透明人間」）に換えることである。なぜなら，彼は外からの批判的な立場を嫌うからで，普通なら全ての論敵と一戦交えて鎬を削ろうものが，ここでは単純に相手を無視する。単純に透明人間扱いして無存在化して葬る。かくてメキシコ市は幽霊の如く静かで不在の透明人間の屍の山と化す。ここでは政治に狂奔する住民の醜態が炙り出される。これは，他所でも語っているように政治優先の国メキシコでは，政治力が経済的成否の鍵を握るのであり，その逆ではないことを物語っている。これは後にマックス・ウェーバーの封建制概念である家産制（Patrimonialismo）との関連で議論が展開されている。同時に，*LDS* 第1章冒頭部分[39]で「各歴史段階のモザイク状の併存」に関する脚注で言及される「新封建主義」（neofeudalismo）の問題提起へと確実に引き継がれている。

LDS 第3章「諸聖人，死者の日」はお祭り好きなメキシコ人が主題となっている。次の「Viva México! hijos de……」（「メキシコ万才！……の息子たち」）は，その絶頂の瞬間（特に，9月15日の独立記念日の夜），メキシコ人が思わず口にする雄叫びであるが，その真の背景を検討しようとしている。先の表題の点線部に入る言葉は公けの場では語られないし，表記されない禁句である。しかし，仲間同士の席やお祭りなどである心的状態が臨界点に達したとき，この言葉の魔力が発揮される。つまり，la chingada（「レイプされた女性」）である。パスはこの，表向きは社会的にタブー視されているが，民衆が無意識に用いる言葉を真正面から吟味する。これによると，子供の頃，パスは

Hosei University Repository

疑問に思っていろんな人に聞いて回った，という。この「犯された女性は誰のことか」と。ところが，解からない。大人になって解ったことは，この言葉が特定の誰かを指すのでもなく，具体的な意味をもつのでもない，ということだった。つまり，無（Nada）である。最初のうちは，何かを意味していたのかも知れないが，もう誰もそのことを覚えていない。ただ民衆の想像力の中だけで膨れ上って一人歩きしている。つまり，Nada（「無存在」）を意味する言葉でしかない。民衆はこの雄叫びによって誇りと絶望心をもって「無から生まれた息子たち」と自己確認しているのである。つまり，「民衆は自分の生活状態や不鮮明な歴史をその言葉のうちに重ねている」[40] と結論づけている。この論文は，*LDS* 第2章「メキシコの仮面」の主題，「開かれたもの」と「閉じたもの」の議論をすでに孕んでいる。同文に於ては，自らを無から生まれた無的存在との民衆の自己認識にニヒリスト的精神文化を見ている。この点，現代社会を特徴付ける人間への無関心をこの時代のメキシコにすでに見出していたことは特筆すべきである。が，しかし，この「開かれたもの」と「閉じたもの」は，*LDS* 第2章に於いて，「犯された女性」が「開かれたもの」という形で記号化されて，イスパノアメリカの文明原理を引き出す際の具体的表象の一つとなっている。征服による精神的外傷が癒えずに残り，外界や身近なものへのメキシコ人の反応の仕方として表われている，と見做す。例えば，「男らしさ」について。どんなに親しくとも相手に自分の内面を見せないこと，である[41]。「他民族に見られることは逆に我々にとっては，自分を開くことは弱さ，ないし裏切りである」つまり，男らしさの規範はストイシズム，苦痛や逆境を物ともしない精神，敗北に際して毅然たる態度を保つ，と同様に諦めることをよしとする風土にも流れている。これに対して女性は，征服者 H. コルテス，愛人マリンチェに象徴されるように「女性は身を任せると自分を開くので，より劣った存在」[42] である。しかしまた，女性は，アステカ文化とカトリック文化の融合の中で宇宙的アナロジーに転稼される。なぜなら，女性は自分から求めず，相手を魅了し引き付ける。その磁力の中心は隠蔽され受身的な性愛，「秘かな不動の大陽」となるからだ。このようにパリにとり，メキシコ人の外界への反応は「閉鎖的」な性格をもつ。パスはこの「閉鎖性」が原因となって，不満が内部に充満し，（お祭りなど形式化されることで一部は緩和されるとしても）それが臨界点に達したところで爆発する，と一担記号化されたイスパノアメリカ的文明原理を，これまでの歴史過程を特徴付ける要因として再適用する。ここ

Hosei University Repository

から第5章「征服と植民地」，第6章「独立から革命へ」へと展開されてメキシコ人の性格が歴史の内でどのような影響を行使してきたかが検討されるのである。

死に関しては，1943年の論文群には *Los beneficios de la muerte*（「死の恩恵」）一編しかない。これまで検討してきた「言葉」「男らしさ」「女性」などに見られる簡潔さに比較すると，特別の章が設けられ破格の取扱いを受けている。本論稿は *LDS* 研究への「導入口」的な性格をもつもので，各章の詳しい議論は別稿に委ねるしかないが，死生観は「閉じられたもの」に傾くメキシコの文明原理として不可欠の要素であるとともに，死の説明は生に対する考え方を裏側から説くものであり見逃せない。パスが *LDS* で特別の章を開いて詳述する背景には，これが外国で，この場合パリを指すが，しかも西洋文化との違い[43]を説明する必要性に強く迫られたなかで執筆されたという成立事情とも深くかかわっているように思われる。その意味でノベダデス紙の掲載論文「死の恩恵」（10月27日付）は対象が国内に限定されるため議論は抽象度が高い。部分的にならざるをえないが，その一端を紹介する。以下の通りである。人は誰も死の恐怖を逃れるために形（式）を残そうとする。政治家は今は無き前任者の業績を壊して，自分の業績に不滅性を刻印する。詩人も詩を書くときはこれと同じ野望をもつ。教師も，父兄も，役者もみな同じだ。「この変化への恐怖，非在への恐怖が歴史の最も強い創造的刺激の一つである」とともに，「人間は，死をより強く意識することで，その生が究極の活力を持った真の生（パスは la Vida（ラ ビーダ）と大文字で表記している）・生命力を取戻す」[44]と締め括っている。後に「真の生」はパス詩学の中心概念（Vivacidad）として詩的現実を構成することになるが，ここではこの点がすでに意識されている。と同時に，ここでは「閉じられたもの」への傾きが一担記号化された上で「形式」偏愛の「性癖」へと置き換えられていく。*LDS* 第2章では，〈開かれたものより閉ざされたものへの優位は，冷静と不信，皮肉と猜疑として表明されるだけでなく，「形式」への好みとしても表明される〉[45]と述べて，政治，経済，芸術，文学，絵画，宗教に於ける「諸形式」の議論へと展開を深めているが，この点に関しては，レヴィニストロースの代表作『親族の基本構造』[46]（1949年）がパスが *LDS* 執筆中に出版されたことと関係していることは言うまでもない。この点を考慮すると，ノベダデス紙上論文に於ける「形式」に関する議論が荒削りだとしても止むをえまい。

Hosei University Repository

11月3日付の「腰を曲げた者とその他の極端」(*Los agachados y otros extremos*) では，教養ある階級や少数派が大文字の「自由」「正義」「革命」「人類」「祖国」といった抽象的な言葉（即ち「形式」）を権威を背景に社会に押つ付けることへの無感覚さを批判している。しかし，それと対置する形で巷で育まれる流行りの表現のうちに生命力溢れる民衆の言語感覚を指摘している。

(3) 孤独の核心

このようにメキシコ人の言語観，女性観，死生観には，「閉じられた」性格が不可分であり，征服の悲劇的経験が大きく影を落している。ノベダデス紙上論文が単純に *LDS* 第2章に再現されてはいないことは明白だ。1949年に執筆が始まるまでに，パリでの様々な人的交流，特にヨーロッパ社会に対しイスパノアメリカの固有性（相違）を説明する必要性がより切実なものとなった。それは「透明人間」性に苛まれるパスが，ヨーロッパに於て存在感の薄い透明の祖国を彫琢する，二重の使命を背負っていたと言える。これが *LDS* 第2章の議論に深みをもたらす結果となっている。本論稿では *LDS* それ自体の分析は主題ではないので，第2章に関してはノベダデス紙上論文との関連でのみ検討した。

最後に次の一点を検討しておかねばならない。つまり，「*LDS* をどのように，何故書いたか」の内に見られるパスの言明部分，即ち，「私は当時（1949年 ── 筆者 ──）それらの記事（ノベダデス紙掲載文のこと）とスペインや米国との出会いが *LDS* 執筆を準備するものであったことを知らなかった」[47] という文言である。マリオ・サンティはじめ大方のパス研究者が共通して述べているように，またそれは前項でも検討したように事実そうなのであるが，掲載文 (Notas) が *LDS* の予備的作業であった，という事実をパスは執筆の段階で認識していなかった，と語っていることである。卒直に言って，筆者は今，このパスの文言を無視してはならないと考えている。要するに，執筆に際して全く念頭になかったのである。これは一体どのように考えればよいのだろうか。ここには歴史と記憶，文学と体験，エッセーとジャーナリズム，といった総じて文学論，作家論と名辞しうる主題を含むものと推察するが，今これを具体的に検討（勿論パスはこれらを随所で語っている）する時間的かつ能力的余裕は筆者にはない。しかし，ここでは今後の研究に則する意味で本稿との関連の範囲で幾つかの断片的な考えを述べておきたい。

Hosei University Repository

まず一つ目は事実認識について。パスの最初の評論集『楡の梨』の中には，ノベダデス紙掲載論文は一切収録されていない。これは定期的に既掲載原稿をテーマ別や年代別に編集し直して出版することを意識的に実践する作家だという点からすると，この全面削除はパスの先の文言に沿うものがある。「削除」という表現は著者パスの意図性を前提にしたものであるから適切ではない。スペイン語で言うところの ignorar という語彙は（その存在に）「無知」であった，ということを意味している。我々がようやくその存在を知るのはマリオ・サンティにより「発掘」された『初期作品集』(1931-1943)』[48] によってである。パスが 1957 年の『楡の梨』以降に偶然ノベダデス論文群を発見したり，記憶が蘇ったりすれば，おそらくすぐさま 1957 年以降の評論集[49] に収録されたか，あるいはその可能性は大いにあった，と言える。先の『初期作品集』の編修出版に伴って著者パスとインタビューしたエンリコ・サンディはその冒頭部分で，ここで筆者が提起したものと同様の疑問を投げかけ，さらにここで推察したものと同様の見解を述べている。「詩的日記からスペイン市民戦争まで，芸術批評からメキシコの習慣に関するエッセーまでとテーマが多岐に及び過ぎて一冊の本にするには一貫性を欠いた」[50] ということだ。このサンティ説は筆者の推察の正当性を認めるものの，それは一部分だけで他の部分では誤りを明らかにしている。つまり，パスはこれらの掲載文の存在を知っていたが，それらを一冊の本にまとめるには関連性が薄いと判断したために出版には至らなかった，ということである。パスが一冊の本にまとめる考えのなかったことは理解できる。従って 1988 年にサンティにより編集出版されるまでその機会がなかったのだが，掲載論文が *LDS* を準備するものであることを知らなかった，という問題については依然として明確にはなっていないのである。

残こす一点は，詩人と詩学の一体化についてである。パスはサンティとのインタビューの中で，1943 年当時の心境を吐露している。「私が当時どんな精神状態だったかは，最終記事群（1943 年掲載文のこと）に表われている。幻滅ではない。むしろ，炸裂寸前，絶対的不満の状態であった」[51] とまでそのときの極限の心境を語っている。しかし，これほど絶望状態にあって執筆されたことの記憶が「抹消」されてしまったのか。なぜ意識の底に保存されなかったのか，ということである。そして，この疑問から逆照射されて立ち上ってくる考えは，そうした意識を完全消去するだけの激烈かつ苛酷な体験を，1943-44 年以降の米国で，そして 1945 年以降のパリで通過することになった，というこ

Hosei University Repository

とを裏から明らかにしていることである。それ以外には，このような感慨を払拭することが出来ない。サンティ説によると，「1943年直後の個人的展開」（が初期作品の存在を忘れさせた ── 筆者 ──）がその原因である，としている。これは筆者の後者の推測にほぼ合致している。「この年，パスは精神的危機とも呼べる状態のなかで周囲を断絶し，メキシコを去った。この断絶は自主亡命を意味し，それはおよそ10年に渡って続いた。その間パスはその作品を再創造した。文字通り，彼は生まれ変わり，別人となった」[52] のである。この考えは，パスの言葉にならない部分（ignorar という言葉には「無視する」という意味もある）にも斟酌を加えて彼の生の危機的瞬間とその詩学の再生の瞬間を一体性の下に捉えている。裏側から言えば，もしパスがノベダデス紙上での孤独な「激論」を不完全燃焼のままロサンゼルスやパリにまで心理的に引きずっていたならば，つまり水面下で彼の深層心理を左右するのであれば，新しい世界に心底身を委ねることは出来なかっただろう。彼は虚空の心境で亡命した。のるかそるかの心境で米国を選択したのである。彼は1950年の代表的詩集への書名『鷲か大陽か？』（¿Aguila o sol?）のうちにその瞬間を刻んだ。1943年の言説は，彼の人格の一部となって彼の心の奥深くに沈み，内面的経験を経ることでもう一つの声となって再生した。それが *LDS* である。同書は1943年までのパスの延長線上にあるのではない。全く次元を異にする文学作品が以上のようにして発明されたのである。

第四章　短詩「街路」と透明人間

内なる「インディオ」と向き合えない。その代わりに向き合った振りをする（disimular），誤魔化す（mentir），そして無視する（ningunear）。それは Don Nadie（ドン ナディエ）。このドンは ninguneador であるし，disimulador でもある。ドンはそのことによって相手を透明人間（Ninguno, el Invisible, Nadie）に換えてしまう。と同時に，自分をも透明人間化する。自分が本来の自分でないため，その不満は鬱積する。特に，征服が残した心的外傷から，lo cerrado（「閉じられたもの」）への性癖が「刻印」され，これは「形（式）」への偏愛に陥る。思想，芸術，（法的，政治的）制度などの「諸形式」に過剰に受容したり，依存したりすることになる。これによって，「爆発」はある程度抑えられ，引き延ばされたりするとしても，結果的には社会の非人間化（その一つが官僚

Hosei University Repository

制）は透明人間化の過程の帰結として制止しえない。その歴史的展望を文学的には，断絶と結合，合体と分離，不一致と和解といった二項対立的に捉えるのではなく，相互背反性と相互補完性の合体のうちに矛盾として捉える。これがパスの，Amor（「愛」）のビジョンの下に於ける詩学の基本原理となっている。この詩学上の全要素が盛り込まれたのが，1957 年作の長詩『太陽の石』である。ここではパス詩学の基本原理をすでに孕んだ詩篇として以下に短詩「街路」を検討する[53]。そこには，パスが青年期から抱えていた「存在の単一性」の問題，つまり「自分は誰か」という問いが実は極めて時代を先取りしたものであったことを物語っているのである。

長くて物音ひとつしない街路。
ぼくは暗闇を歩いてつまずき，倒れて
立ち上がる。そしてめくら滅法に
無言の石と乾いた木の葉を踏んで歩く。
そしてぼくの後の誰かも石と木の葉を踏んでいる。
ぼくが立ち止まると，かれも立ち止まる。
ぼくが走ると，かれも走る。ぼくが振り向いても
誰もいない。

何もかもが暗くて，ドアもない。
そしてぼくが街角をいくつ回っても
その街角はいつもその同じ街路へと通じていて
そこでぼくを待つ者はいないし，ついて来る者もなく
そこでぼくが一人の男を尾行すると，かれはつまずいて，
立ち上がり，ぼくを見ると話しかけるが，
誰もいない[54]。

この短詩は明らかに回転している。この考えは理論的に展開され，「回転する記号」[55] として 1967 年に出版された増補改訂版『弓と竪琴』[56] に収録されている。同詩篇は回転する詩形式に特徴付けられるが，読み手の参加，即ち，作家と読者のコラボレーションによって螺旋状（espiral）詩形式にメタモルフォーズする言語転換が実験されている点がパス詩学上の画期的作品と言える。

Hosei University Repository

暗い裏通りを歩いていて，誰かが後ろから急接近してくる。その一瞬，本能的に身構えてしまう。そのような粟立つ体験は誰にもあるだろう。物音，足音はするが，相手の姿，正体が見えない。「誰なんだ」「誰でもないのか」と，一層恐怖感が膨らむ。サスペンス映画の一場面を想起させる。パスは1944年から2年間，米国を放浪のあと，1945年12月末に三等書記官としてパリに赴任する。この短詩は，1949年の詩集『言葉の陰の自由』（1935-1957）第Ⅱ章「災厄と奇跡」（1937-1947）所収の「断罪の扉」（1938-1946）を構成する22篇の一つである。時期的に，メキシコ，米国，フランスと重なるので特定しにくいが，最近出版されたスペイン人詩人ペーラ・ジムフェレールとの往復書簡[57]によって同詩篇が1943年から1946年の間の作品と絞り込める。一般的には，メキシコではこの詩篇は想像しにくい。「パリでは，他のラテン諸都市と同様に人生は家の中よりも街路にある」[58]と語っていることからも明らかだ。勿論，ここで言う「街路」とは「世間」を指すが，「熱い」ラテン諸都市の街路からは着想しにくい。また，彼は，*Itinerario*（『旅程』）の中で，パリ時代を回想して，「パリのコスモポリタンな環境の中で自由の空気を吸った。そこは身分証明書の提示を求められない一つの祖国」[59]，このように，パリでは包み込まれるような安堵感を抱いている。しかし，米国では対極である。当時，ロサンゼルスを中心に米国人青年と米国系メキシコ人，通称「パチューコス」（パスは自分を彼らに重ねていた）との衝突事件[60]も発生したことを考慮すれば，米国での対極的な街路体験に触発されて生まれた詩篇と考えるのが妥当であろう。

ところで，この詩篇が回転するとは一体どのようにしてなのか，またそれはどのような意味をもつのだろうか。先に掲載した真辺訳を見るかぎり，回転それ自体は詩の形から明らかとなってもその意味については理解するのは困難である。真辺訳で二度繰り返される「誰もいない」の原文は単純にNadie一語である。文法的には何ら疑念を抱かせるものではない。代名詞で，特に「不定語」「誰も～ない」に区分されている。動詞を補うとすれば，está がその一つである。しかし，es に置き換えても同様に韻を踏む。Nadie es は日本語に訳すと，「誰でもない」。Nadie に補なわれたそれぞれの動詞 está と es は動詞 estar と ser の活用形直説法現在三人称単数に相当するもので，いずれに換えても韻を踏む。しかし，estar と ser は動詞の意味からすると，全く異なる。前者は，特定の人やものの所在，動的なものを表わし，後者は性質，本質的な

Hosei University Repository

もの，不動のものを表わす。つまり，〈Nadie está〉と〈Nadie es〉とが対極を意味することは明らかである。つまり，この詩篇は動と静の矛盾する原理を一瞬の和解のうちに捉えている。それは回転させられることによって Nadie está が死んで，Nadie es が生まれる。あるいはまた，その逆である。死と生，生と死という回転がパスの詩学に重なる。その回転の動因は読み手をおいて他にない。スペイン語の estar と ser 二つの動詞の特徴がゲーム感覚をもって活用されている。Nadie es とは，「何者でもない」を意味する。従って，Nadie está と読めば「透明人間」がそこに現われる。また，Nadie es とすれば，「実存人間」が出現する。パスやウシグリがいた 1945 年前後はパリではサルトルらの実存主義的演劇全盛の時代である。パスは時代のエスプリをスペイン語の estar と ser の特徴を生かして，見事にこの短詩の中に閉じ込めたのである。何故，それが可能になったのか。この問いは，1943 年以前から透明人間（Nadie está）の言葉の中にすでに Nadie の両義性として存在していた，ということを考えれば，それ自体変更されねばならない。即ち，何故，現代社会の特徴たる Nadie es という固有の，本来の自分を求める思想が先進国に先行して，あるいは同時代的に孕んでいたのか，ということであろう。1959 年に *LDS* は増補改訂されるが，その際，最終章して「現代」（Nuestros días）が追加されている。そこでは 18，19 世紀の近代の「助走」なく死活問題として急速な近代化を余儀なくされる，所謂，「後発資本主義国」について，特にそこでの革命の役割を議論している。その最終フレーズに「我々も欧米先進国と同時代人となった」[61] とある。後年，この箇所を，メキシコも先進国と同一線上に並んだと読み誤える者がいると，そうした考えの背景にある，歴史発展段階説を批判している。そして改めて現代社会に於ける人間存在の不確かさ，と同時に本来の自分に戻ることの意味を論じている。短詩「街路」は透明人間の詩（うた）であるとともに，「実存人間」の詩である。パスの回転の詩学は同時に螺旋の詩学である。

第五章　『孤独の迷宮』冒頭文に関する一考察

オクタビオ・パスの文体は分野を問わず，ある共通性を持っている。いずれもが一種の「交響詩」に類似する。「街路」以来，われわれはもう多言を要しないが，その両義性に満ちた言葉が結合と分離を展開して読み手を森の中を遊

Hosei University Repository

泳する心地にさせる。それ故にまた多くの訳者にとり，実際に日本語に翻訳する際の困難は尋常ではない。パスの作品群のうちの主たる部分が既に邦訳されているという事実は，この点を考慮すると驚嘆すべきことである。本稿も翻訳に関しては先達の多くの偉業に依拠するものである。ところで，パスは何故このような，言うならば「文体」を用いるのか，あるいは用いる結果となるのか。それは，彼が詩人だから，と言ってもよい。自らの他者性にどこまでも明晰であろうとする。それは一体如何なることなのか。当然のことながら，回答は千差万別である。本論稿を通して考えてきたことも，この問いへの回答の幾分かを含んでいるものと確信するが，今改めて『孤独の迷宮』に読み入るにあたって，その原文から見た文体（今は冒頭文に限るが）の個性の背景について試み的に考えてみたいのである。ところで，メキシコないしイスパノアメリカは，16 世紀の初頭に世界史に合流したのである。それ以前は，その文明は完全に孤独の内に営々とただ「一人で」生み出し築き上げられた。世界の，所謂四大文明と言われるものとは根本的に異なる。先ずこの事実を前提にしないと，イスパノアメリカ文明との比較は一切成立しない。パスはこの世界史の事実を誰よりも強く意識的であろうとする詩人である。つまり，メキシコなり，イスパノアメリカのことをそのまま外（それ以外の文化圏）に説明してもうまく伝達しえない，のと同様に西欧のことをそのままに言われても伝わってこないのである。したがって，西欧にも解かるように考慮してメキシコを語り，メキシコにも解るように考慮して西欧を語る，そういう双方の文化や価値，意識や感情を考慮した上で伝達（transmitir）する必要が強く意識されるのである。例えば，*LDS* 第一章「パチューコおよびその他の極端」の冒頭の一文を考察してみよう。

> "A todos, en algún momento, se nos ha revelado como algo particular, intransferible y precioso. Casi siempre esta revelación se sitúa en la adolescencia."

上記の冒頭文は，心理学的とか，文科人類学的とか言った科学的，実証的な技術による確認よりも，人間に共通の体験といった，そういう瞬間のあることを確認している。要するに，理屈に訴えてはいないのである。人間の内部からの不思議な出来ごととして共通体験に訴えている。これがまず最初，本書のエッ

Hosei University Repository

セーとしての性格を冒頭に於いて宣言することになっている。第一文には，動詞 revelar（「暴露する」，「明示する」，「啓示する」，など），第 2 文には，その名詞形，revelación が連続して用いられている。一息に書き始められた，冒頭の十数桁の文は自動記述的な半覚醒のうちに流れ出たものだろう。パスは *LDS* の「始まり」の「始まり」を意味する冒頭の第一文に，普遍化した表現法ではあるが，自分の始まりを重ねるとともに，メキシコ，さらにイスパノアメリカの始まりを重ねる。しかし，その「始まり」は，revelar や revelación という言葉によって象徴されるように，極めて強い宗教性を印象付けている。しかし，この部分の吉田秀太郎訳（「われわれは誰しも，かつてわれわれの存在を，何かユニークで取り替えのきかない，大へん貴重なものだと考えた経験がある。こうした天啓にあずかるのは，大ていの場合，青春期においてである」）(62) も，高山智博・熊谷明子訳の（「ある時期がくると，我々はみな自己の存在を何か特殊で代えがたい貴重なものとして知覚する。このような啓示は殆どいつも思春期に現れる」）(63) も共に，日本語として理解しやすい点に配慮して，特に冒頭第一文については，この「言葉」の意味の一つ「啓示（する）」が与える宗教性の側面については削除している。第二文については両日本語訳とも「天啓」「啓示」という訳語が当てられ宗教的色調を抽出している。しかし，revelar という同系列の語彙が二度連続的に用いられることで効果を上げる宗教性，音楽性については翻訳上対応し切れていない。こうした事態は，原文のもつ独立した意義，つまり原語をそれが本来抱え込むポリフォニックな振幅の内で味わうことが可能だという啓示を与えるのである。既に何度が検討を加えたパスの自伝的作品『旅程』（*Itinerario*）所収の論文〈どのように，なぜ『孤独の迷宮』を書いたか〉の中で彼は *LDS* 執筆時の様子を回想している。「私は大急ぎで流れるような筆致で，一刻も早く終えたくて，そしてあたかも最後の一頁にある啓示（una revelación）が私を待っているかのような気持で書いていた」と，祈るような気持で書いていた，という。また，「書くことで私はメキシコを痛めつけ復讐していた。そして，次の瞬間には，私の文が私に刃向かってきて，メキシコが私に復讐していた」とも語っている。*LDS* はパスとメキシコとの愛憎関係（それは決して終わりのない迷路だが）に結着をつけるべく執筆されたのである。彼はその結末に祈るような気持で向っていた。冒頭の二つの文に用いられている revelar は全て，このときのパスの内的世界と一体化しているもので切り離せない。さらにまた，メキシコ人が歴史それ自

Hosei University Repository

体の「始まり」について抱く宗教性とも不可分だろう。コルテスらスペイン人の征服よりも前にすでにアステカの民は全てを献上すべき人，原所有者である神ケツアルコアトルの帰還を待っていたのである。元来，彼らがそのような神話からくる宗教的宿命感に捕えられていたからこそ，スペイン人コルテスを見たとき一瞬同じ人間か神かと怯んだ。それが彼らの歴史を決定付けたのである。従って，歴史の始まりは神話性，宗教性が刻印されているのだ。*LDS* の初めに宗教性が帯びるのは，そこにパスが自分とメキシコの歴史の「始まり」を開こうとして自らその迷路に身を投じた，そうした行為であるからだ。様々な「歴史」の「始まり」が重層化して，revelar という言葉の意味に重ねられているのである。

第六章　「我々」vs. コロンブス ── 結びに代えて ──

LDS に青春を重ねる人は少なくない。特に，1970 年代前半にスペイン語を学び始めたり，メキシコ留学を経験する日本人には *LDS* は新鮮なメキシコ体験の一つとして残っている。メキシコに到着すると同時に，この書物の存在を誰彼となく聞き知って，書店に駆け込んで貪り読んだ。ある者は孤読を選び，また他の者は群読，輪読を好んだ。難解である。メキシコの歴史，社会，政治，文化など全てを吸収し，さらにそれを身をもって経験したパスが，当時の西欧文化の風の刃の如き，シュールレアリズムや実存主義哲学（1938 年にメキシコ亡命した哲学者ドイツ系スペイン人ホセ・ガオスによって 1951 年に M. ハイデガーの『存在と時間』がスペイン語に訳されている）などを受容しつつ，自分の模索を自由に綴った試論である。咀嚼不可能な，何か硬質なものと対峙した，という感触とともに，対外的に訴え，説得し，共感を求める，そういう投企性のない，むしろ自らの判断能力を試しつつ，自分を試練に晒すという強い内面指向性と前方不確定性に魅了された。そこに自分たちのことが書かれていると予感しながら，「回答」として何らかの知識や情報を取り出すことが出来ない。そこから我々の多くにとり，*LDS* は親しみを覚えるとともに，惨敗したとの心境を少なからず抱かせるものであった。*LDS* こそメキシコを理解することを目ざす者にとっての「登龍門」だとの気負いがあり，我々の抵抗は様々な形でなされたことは言うまでもない。この簡潔で引き締った，流麗な音の楽を感じさせる詩文詩を執拗に読み続けた。誰かが音読を始めたとき，我々

Hosei University Repository

は*LDS*を散文詩として再発見したのである。それからおよそ30年が経つ。この間，*LDS*を開くたびに最初の出会いの時と場所が彷彿と眼前に立ち現われる。その意味で，この書物は我々の青春の一コマとして刻まれている。

しかし，このように我々が*LDS*に関心を寄せる背景には一体何があるのであろうか。メキシコの文化と歴史を知ることを，ただ純粋に自分自身の教養のためと言葉では言うことが出来る。しかし，それではどうしてメキシコでなければならないのかという問いに答えるのは難しい。教養の糧としてメキシコを選ぶことは，ヨーロッパから近代の思想や制度を導入した日本に於ては，大勢に逆行する行為であり，30〜40年前では尚さらであろう。したがって，それは既に日本に根を下していたスペインを選ぶのと違ってより深く思いの募ったものが背景になければ，現実には関係性の生じる状件の低さに照応して少ない分，興味（ある程度操作の結果であるとしても）の生じようもないし，それ以上に教養の糧ないし，学問としての地域研究の対象となりにくいと考えるのが妥当だろう。従って，我々がメキシコに向ったその動機のうちには，多かれ少なかれ，この馴染みの薄い国（であればあるほど）に関する知識（その他，情報一般）のもつ稀少価値に痛切な期待感を抱いていた，と言っても過言ではないのだ。それでは，いささか唐突な言い方になるが，我々は同じ稀少価値を求めて我々と逆方向にアメリカに向ったコロンブスと何ら変るところがない。地域研究の対象としてのメキシコは，稀少価値の高い地域の一つであったことは言うまでもない。我々の誰かが特定の研究課題その他で，メキシコ（あるいは中南米のその他の国）を現実の関係性からは想像できない程の強い純粋な興味を抱くことがあったとしても，大学の地域研究という制度的柵組みの下でアプローチする限り，そこに生産性を求められるのは至極当然のことである。純粋な知識欲や未知の世界に対する見聞を趣味として深めるといった，つまり一般に共有され，使用価値の生じない関係性は成立しえないのである。この世界のもつ稀少性に対する価値判断が根本にあって我々の征服欲を駆り立てていたことは事実として認めねばなるまい。であるとすれば，コロンブスにとっての『東方見聞録』に相当するものが，我々にとっての『孤独の迷宮』ではないのだろうか。これに関して，パスの認識は深く示唆に富む。「真の世界史はヨーロッパやアジアの大帝国，ローマや中国をもって始ったのではない。スペイン，ポルトガルの探索（exploraciones）をもって始った」[64] 今，試み的に言うなら，このexploracionesには「探索」「探検」のみならず，「探求」「調査」も

Hosei University Repository

含まれる。つまり，我々もまたパスの言及の対象に含まれるのだ。スペイン，ポルトガルの「行為」の現代版を目的としていることに他ならない。つまり，exploraciones による知識，情報の獲得は「征服」に向けた行為の一型態，あるいは一準備形態なのである。「征服」という言葉が時代錯誤として，他のどのような言葉に代えても支配欲，所有欲に根ざした行動という事実を消し去ることは出来ない。コロンブスから学ぶものは多くある。彼が支配，あるいは所有に先立って行ったことは先住民を「インディオ」と名辞したことだ。インディオとは何を指すのか。何も指さない。何の実体もないものである。「非なるもの」（これは「パーリア」である），自分たちの「外なるもの」全てを指しているだけである。そのように自分たちの埒外に一担置いた上で，神学という当時の知識の体系によって捕縛され，操作されたのである。それはル・クレジオが『メキシコの夢』[65] に於て鬼気迫る筆致で物語ってすでに久しい。「インディオ」の名称が知識の対象を生んだのだ。デカルト以来の西欧近代の手法がすでに16 世紀初頭に始まっているのである。19 世紀の初めにスペインの征服，植民の時代は終ったが，インディオという外なる存在は相変らず続いた。そして今日に至るまで近代の合理精神の下で不可視の現実として続いているのだ。さらに，現代の「コロンブス」が陸続と列をなして押し寄せている。我々が「コロンブス」を止めぬ限り，メキシコその他アメリカ全般は「外なる存在」，透明人間であり続けるしかない。パスは 1942 年の発表論文「孤独の詩，感応の詩」[66] に於いて「新しい人間」を語っている。それは彼の観想が相手の支配，服従のための知に向わず，ただ対象の内に忘我することを意図する。即ち，自己放棄，聖なるものへの崇敬の念，愛するものとの融合，こうした現実に対する虚しく，役立たずの態度をもってこそ近代合理性の知の下で人間の喪失したものが再生される，と述べている。パスが示唆するものは，相手（ないし，対象）を客観視して外から観察するのでなく，自分に重ねること，内なるもの，即ち，内なる「他者」となすこと，そのことによって最も真なる現実が啓示されると考えるのである。この考えは現実を理解するということが内なる「他者」との不断の対立と和解として，つまり「道」（camino）として捉えることに他ならない。「このようであってほしいメキシコ」「このようであってほしくないメキシコ」「このままでいてほしいメキシコ」など，合理的に割り切れず，矛盾のうちに，まさに「アモール」（Amor）のビジョンの下にメキシコを探求した *LDS* のうちに，我々の内の「コロンブス」性を克服する道が示されてい

Hosei University Repository

るのである。 (了)

《注》

(1) 前者はギリシャのオリエント化，オリエントのギリシャ化を論じ，後者はスペインのメキシコ化，メキシコのスペイン化を論じた。
(2) ズアーブ兵。1830年にアルジェリア人で編成したフランスの歩兵隊兵士。ハプスブルグのマクシミリアーノ皇帝支援のためメキシコに派遣された。
(3) メキシコ軍の一部，ゲリラ兵。
(4) 真辺博章編・訳『オクタビオ・パス詩集』土曜美術社出版販売，1997，24頁。
(5) Octavio Paz, México en la obra de Octavio Paz, I. El peregrino en su patria FCE, México, 1987, p. 708.
(6) Octavio Paz, Lo mejor de Octavio Paz, El fuego de cada día. Seix Barral. España, 1989, p. 178.
(7) Octavio Paz, Obra Poética (1935-1988). Seix Barral, España, p. 427.
(8) Octavio Paz, Obras Completas Tomo. 11, Obra Poética I (1935-1970), Circulo de Lectores, FCE, 1996, p. 373.
(9) ídem, pp. 372-373.
(10) Octavio Paz, Obras Completas, Tomo. 12, Obra Poética II (1969-1988), Circulo de Lectores, FCE, 2003, p. 144.
(11) 祖父イレネオ・パス (1836-1924)，父オクタビオ・パス (1883-1936)。
(12) Octavio Paz, Pasado en claro, FCE, México, 1975, p. 30.
"atado al potro del alcohol, mi padre iba y venía entre las llamas. Yo nunca pude hablar con él. Lo encuentro ahora en sueños, esa borrosa patria de muertos. Hablamos siempre de otras cosas."
(13) オクタビオ・パス『弓と竪琴』牛島信明訳，国書刊行会，1980，222頁，*El Arco y la Lira,* FCE, 1956 (1967), p. 163.
(14) *Op. cit.*, p. 30. "Mientras la casa se desmoronaba, yo crecía. Fuí (soy) yerba, maleza, entre escombros anónimos."
(15) Enrico Mario Santí, El acto de las palabras — estudios y diálogos con Octavio Paz — FCE, México, 1997, p. 74.
"Imagínate que después de lo de El Popular me quedé sin un centavo. El gran problema de aquella época, para todos los jóvenes, era no cómo vivir, sino cómo sobrevivir."
(16) Octavio Paz, Rodolfo Usigli en el teatro de la memoria, Obras Completas T. 14, Miscelanea II, p. 124. "Rodolfo y yo convivimos durante dos años en nuestra embajada en París; él era el segundo secretario y yo el tercero."
(17) Diccionario del Español Moderno，白水社；①目に見えない ②貿易収支外の，Diccionario Español-Japonés，小学館；①目に見えない ②表に現われない，Nuevo Diccionario Español-Japonés，研究社；①目に見えない ②表面に出ない

Hosei University Repository

(18) 前掲書，p. 126. "Salíamos una noche de uno de aquellos sitios y al verse en un espejo, exclamó: ¡Me he vuelto invisible! Aquel exabrupto me hizo reir..... y llorar."
(19) H. G. ウエルズ著『透明人間』橋本槙矩訳，岩波文庫，1992.
(20) 同書，232 頁。
(21) 前掲書，p. 127.
(22) 同書，p. 126.
(23) 同書，p. 127.
(24) 同書，p. 124. "Aparte del ninguneo de su país, ..."
(25) Octavio Paz, Cartas a Tomás Segovia (1957-1985) FCE, México, 2008, p. 68. "Me recibieron, desde el principio — eso pasaba hacia 1946 o 1947 — como si yo hubiese sido el que faltaba el mexicano o el hispano-americano que no había llegado en 1930, pero que aunque tarde, al fin acudía a la cita."
(26) Octavio Paz, A la orilla del mundo, ARS, 1942, p. 155.
(27) Octavio Paz, Libertad bajo palabra, Tezontle, México, 1949, p. 134.
(28) Correspondencia Alfonso Reyes — Octavio Paz (1939-1959) Edicion de Anthony Stanton, FCE, México, 1998.
(29) 同書，p. 20.
(30) Octavio Paz, Obras Completas, T. 11, Caramidades y milagros (1937-1947), p. 84.
(31) 森有正著『思索と経験をめぐって』講談社，1976，51 頁。「そして，私は一つのことがわかり，理解することが出来るものは決して知的面だけの問題ではなく，もっと経験全体の変容，その成熟にほかならず，それを確定するものとして知的判断が表われてくるのだということを知るのである。私はそれを「変貌」と名づけたいと思う」。
(32) Octavio Paz, *Itinerario,* FCE, México, 1993, pp. 14-18.
(33) 同書，p. 14.
(34) Octavio Paz, *Las peras del olmo,* Seix Barral, España, 1957.
(35) Octavio Paz, *Puertas al campo,* Seix Barral, España, 1972.
(36) 同書，p. 10. "Sin él nunca seremos realmente lo que realmente somos — ni ellos tampoco."
(37) Humberto Musacchio, Diccionario Enciclopédico de México, Andrés Leon Editor, México, 1989, p. 1366.
(38) Octavio Paz, *Primeras letras (1931-1943)*, Vuelta, México, 1988, p. 307.
(39) Octavio Paz, *El laberinto de la soledad,* FCE, México, 1950, 1995, p. 14.
(40) 前掲書，p. 314.
(41) 前掲書，p. 33.『孤独の迷宮 —— メキシコの文化と歴史 ——』，髙山智博，熊谷明子訳，法政大学出版局，1982，22 頁。
(42) 前掲書，p. 22.
(43) 古代アステカ人にとっては死は世界を救う。西欧キリスト教ではキリストは自

Hosei University Repository

らの死をもって個人を救う。現代メキシコ人にとっては，死には無関心，生命さえも。

(44) 前掲書，p. 376.

(45) 前掲書，24 頁。

(46) 今村仁司編『現代思想を読む事典』講談社，1988，790 頁。

(47) Octavio Paz, *Itinerario,* FCE, México, 1993, pp. 27-28.

(48) Octavio Paz, *Primeras Letras (1931-1943),* Vuelta, México, 1988.

(49) Sombras de obras, Seix Barral, España, 1983, Hombres en su siglo y otros ensayos, Seix Barral, 1984, Pasión Crítica, Seix Barral, 1985.

(50) Enrico Mario Santí, El acto de las palabras, Estudios y dialogos con Octavio Paz, FCE, 1997, p. 66.

(51) 同書，p. 77.

(52) 同書，p. 66. "En 1943, en lo que no se puede llamar menos de una crisis moral, Paz rompe con su medio y se marcha de México. la ruptura significa un autoexilio que ha de durar toda una década durante la cual Paz rehace su obra: literalmente se rehace, se hace otro."

(53) 阿波弓夫〈オクタビオ・パスと短詩「街路」〉季刊 iichiko, No. 86, 2005, 97 頁参照のこと。

(54) 真辺博章編・訳『オクタビオ・パス詩集』土曜美術社出版販売，1997，24 頁。

(55) Octavio Paz, *Los signos en rotación,* Sur Buenos Aires, 1965, p. 70.

(56) Octavio Paz, *El arco y la lira,* FCE, México 1967, p. 301.

(57) Octavio Paz, Memorías y Palabras, Cartas a Pere Gimferrer 1966-1997, Seix Barral, España, p. 231.

"En los poemas que es cribí en esos años, entre 1943 y 1946, hay acentos que prefiguran la poesía que ellos escribirían un poco más tarde. (略) Pienso en algunos poemas de Puerta condenada (《la calle》)".

(58) Octavio Paz, *Vislumbres de la India,* Seix Barral, 1995, p. 6.

(59) Octavio Paz, *Itinerario,* FCE, 1993, p. 28.

(60) Javier Rico Moreno, Poesía e historia en El laberinto de la Soledad (Tesis doctoral) UNAM, Facultad de Filosofía y Letras, 2006, p. 98. "En junio de 1943 Los Angeles fue sacudido por el ataque de un grupo de marineros y civiles blancos contra jóvenes mexicanos. La juventud mexicana se en frentaba a idénticos problemas que la blanca, pero tenía que soportar además los prejuicios de sus conciudadanos. (以下略)" (Willi Paul Adams, Los Estados Unidos de América, p. 340 よりの引用)

(61) Octavio Paz, *El laberinto de la soledad,* FCE, p. 210. "Somos, por primera vez. en nuestra historia, contemporáneos de todos los hombres."

(62) オクタビオ・パス『孤独の迷路 ── 素顔のメキシコ人 ──』吉田秀太郎訳，新世界社，1976，1 頁。

(63) オクタビオ・パス『孤独の迷宮 ── メキシコの文化と歴史 ──』高山智博，熊谷明子共訳，法政大学出版局，1982，1 頁。

Hosei University Repository

(64) オクタビオ・パス, *Itinerario*, FCE, 1993, p. 22.

(65) Le Clézio, LE RÊVE MEXICAIN ou la pensée interrmpue, Editions Gallimard, 1988.『メキシコの夢』望月芳郎訳, 新潮社, 1991.

(66) Octavio Paz, "Poesía de soledad y Poesía de comunión," Las peras del olmo (Seix Barral, 1957) 所収, p. 95.

(メキシコ政治／文化・市ヶ谷教養教育センター兼任講師)